様式9（添付1－4）

平成29年度　帰国･外国人児童生徒等教育の推進支援事業
（Ⅱ　定住外国人の子供の就学促進事業）
事業内容報告書の概要

都道府県･市区町村名［岐阜県可児市］

平成29年度に実施した取組の内容及び成果と課題

１．事業の実施体制

就学年齢前から就学年齢を超えた外国人の子どもで就学等を希望するものに対して、市とNPO団体が連携してそれぞれのニーズにあった教室を実施する。

外国につながる子ども	教室（学校外）	コーディネート	受入先
就学年齢前の子ども	就学前準備指導教室「ひよこ教室」ＮＰＯ法人可児市国際交流協会	国際交流協会 教室コーディネーター	小学校 中学校
初めて日本の公立小中学校へ就学希望する子供	初期日本語指導教室「ばら教室ＫＡＮＩ」市教育委員会	ばら教室コーディネーター	国際教室 ↓ 在籍学級
不登校・自宅待機の子ども	不登校・自宅待機の子どもの就学指導教室「ゆめ教室」ＮＰＯ法人可児市国際交流協会	国際交流協会 就学コーディネーター	
就学年齢を超えた子ども	就学年齢を超えた子どもの高校進学支援教室「さつき教室」ＮＰＯ法人可児市国際交流協会	国際交流協会 進学コーディネーター	高校 地域活動

連携

□連携団体（事業委託団体）

団体名称：特定非営利活動法人可児市国際交流協会
代表者名：理事長　渡邉孝夫
所 在 地：〒509-0203 岐阜県可児市下恵土1185番地7（可児市多文化共生センター内）
連 絡 先: 0574-60-1200
団体概要：市民主導により2000年に「可児市国際交流協会」を設立。設立当初は日本語学習や異文化交流などが中心であったが、2003年の外国人の子供の教育調査によって不就学の子供の存在が明らかとなり以後、外国人の子供の就学支援等に力を入れている。
2008年にNPO法人となり、同年から可児市多文化共生センター指定管理者として管理、運営を行っている。また、今回申請する各教室については、これまで国際交流協会が実施してきた事業を継続して行うものである。
団体組織：役員会（顧問2人、監事2人、理事12人で構成）
会員数575人（正会員238人、賛助会員337人）
事務局スタッフ11人

２．具体の取組内容

①不就学等の外国人の子供に係る学校等との連絡調整
・教育委員会との情報交換
・市内中学校との懇談：不登校になりそうな生徒の情報交換
・可児市外国人児童生徒コーディネーターとの情報交換

②学校外における、不就学等の外国人の子供に対する日本語、教科若しくは母語指導又は学習習慣の確保に係る指導のための教室の開設

可児市の公共施設を活用し、年齢や就学に対する子どもの状況に合わせて、日本語、教科、生活習慣等の指導を行えるよう、４つの教室を設置した。

１．初期日本語指導教室「ばら教室ＫＡＮＩ」（市教育委員会）

日本の公立小中学校への就学を初めて希望する児童生徒や他の市町から転入してきた日本語に困難のある児童生徒を対象に、学校教育に必要な初期的な日本語指導や生活指導等を集中的に実施した。平成 29 年度の修了者は 38 名であった。

・初期指導では、基礎的な日本語指導だけではなく、学校のきまりやマナーなど規範意識をはぐくむ生活指導、当番活動や清掃活動など日本の学校生活に関する指導、日本の文化や習慣に関する指導、食生活への適応など、日常の中で包括した実践に留意した指導を行った。
・多くの不安や悩みを抱える保護者との連携を密にとりながら、積極的な教育相談にも努めた。
・在籍学校の見学や、在籍学校の先生にばら教室ＫＡＮＩの授業参観を依頼するなど、連携を密に行った。

２．未就園児の小学校入学前準備指導教室「ひよこ教室」（ＮＰＯ法人可児市国際交流協会委託）

次年度就学年齢の子どもに対して円滑に小学校へ入学させるための日本語指導及び生活指導、保護者へのガイダンス等を実施した。参加人数は年長児 14 人であった。

・日本の幼稚園・保育園に近いスタイルで取り組む。
・ひらがな・カタカナの読み書き指導は行わないが、自分の名前は分かるようにする。日本の絵本の読み聞かせや日本の童謡を歌い、きちんと座る、はつらつと元気になど、小学校で必要な学習姿勢を身に付けさせる。迷路やぬり絵などで、鉛筆の持ち方や運筆の練習をする。
・遊びや活動を通して、社会性を学ぶ。
・母語学習：言語形成に大事な年長時に文字や数、知恵、母文化を本国の方法で学ぶ。
・その他：給食指導や必要に応じて、入学ガイダンスなど保護者懇談会を行った。

３．不就学・不登校・自宅待機の子供の就学支援教室「ゆめ教室」（ＮＰＯ法人可児市国際交流協会委託）

家庭環境その他の事情により、不就学、不登校となっている子どもや、市教育委員会が設置する日本語初期指導教室「ばら教室ＫＡＮＩ」の定員超過のため、自宅待機となる子どもを対象に日本語指導及び教科指導を実施した。在籍人数は 7 名であった。

・日本語初期指導として、主に日本語と算数を学習する。
・日本語については、ひらがな・カタカナ、語彙を学習
・算数については、入室時に学力テストを行い、どの単元ができるのか、未習なのかを確認し、レベルに応じた学習をする。
・市内中学校での日本語支援。
・言語対応できる支援者が、学校での入り込みで対象者の支援をする。

４．就学年齢を超えた子供の進学等に向けた支援教室「さつき教室」（ＮＰＯ法人可児市国際交流協会委託）

主に就学年齢を超過した子どもに対して、高校進学への教科指導、日本語指導、生活指導を実施した。参加人数は年間 11 名であった。（退室者 2 名）

・日本語教材を活用し、文法積み上げの日本語の基礎を指導し、作文や面接の練習を行った。また、進路に合わせ、国語（日本語）、数学、英語をしっかり指導し、５教科受験対象者には、受験対

策として理科、社会を指導した。
・可児市教育委員会の進学ガイダンスに参加し、先輩高校生の話を聞く機会をつくった。また、11月に可児市国際交流協会がフィリピノ語、ポルトガル語通訳を入れた進路説明会を開催した。適時保護者にガイダンスを実施した。
・保護者面談を入室時、個別面談などで3回以上行うようにした。
・地元の可児警察署の署員から護身術や安全講話を聞いた。
・ライフプランとしての性教育ワークショップを実施した。
・東京芸術劇場、朝日大学、愛知淑徳大学と連携し「各務原少年自然の家」という研修施設で合宿し、イギリスの演出家と演劇ワークショップで将来について考える取組みを実施した。
・NPO法人日本ワールドキャンプと愛知淑徳大学小島ゼミと連携し、株式会社シチズンの社員と「ファーストウォッチつくり」や仕事のやりがいの講義、大学生との「ドリームマップつくり」を行った。
・フレビアのイベント時や就学前の子どもの教室のサポートなどのボランティア活動の奨励を行った。
・皆勤賞やフレビア漢字検定などを設け、勉強のモチベーションの維持に努めた。
・6人が高校に合格した。東濃高校　1人、加茂高校定時制　3人　犬山高校定時制　2人

④不就学等の外国人の子供に係る地域社会との交流の促進
さつき教室、ゆめ教室、ひよこ教室の対象者に、地域住民との交流や、高校進学や就職をした先輩の話を聴く機会を定期的に設けた。
・さつき教室の生徒を中心に高校見学を行い、５校を訪問した。
東濃高校、東濃実業高校、加茂高校定時制、加茂農林高校、犬山高校定時制、たくみアカデミー
・朝日大学を見学し、相撲部の生徒と交流した。大学の見学をすることで、アカデミックな雰囲気に憧れ、進学に興味をもつ生徒もいた。同大学には、留学生別科もあり大学独自の奨学金も充実しているため、現実的なものとして興味をもてたようだった。
・中日新聞の子ども weekly を活用した授業を行い、NIE 全国大会名古屋の特別分科会に参加し、取組を報告した。

⑥その他不就学等の外国人の子供の就学の促進に資する地域独自の取組
ばら教室のコーディネーターを中心に不就学児調査を行い、実態把握と不就学者には就学指導を行った。
・住民台帳から就学年齢にある外国人児童生徒のうち、平成２９年４月１日～平成３０年２月１日までの異動者リストを作成し、そこから学齢簿に記載されている児童生徒を除いたリストを作成する。
・そのリストにある児童生徒について、ブラジル人学校等への在籍、帰国（転出）予定、居所不明（居住実態無し）、不就学等の実態を調査する。
・最初は郵便で実態を返信してもらうこととし、返信の無い家庭にコーディネーターが家庭訪問して確認する。
・調査の結果不就学であった家庭に対し、ばら教室ＫＡＮＩのコーディネーターが就学を勧める。

３．成果と課題

【成果】
・市が国際交流協会に委託した教室の特徴を理解することで、お互いの連携がスムーズになり、子どもたちの個性を尊重する指導ができた。
・各教室において保護者への働きかけを行うことにより、保護者が日本の教育制度や文化を理解するようになり、就学に対する義務意識が高まった。「ひよこ教室」は必要に応じて保護者懇談会を実施することができた。
・就学前において、学校や可児市教育委員会、こども課、子育て支援課との連携により、保護者を交えた学校体験を可能にし、入学前の心構えや特別な支援が必要な子どもに対して、適したクラス設定の準備などスムーズに行うことが出来た。
・在籍生徒が多い中学校と関わりが持てたことは、今後、可児市の子どもたちを支援していく中で、大変重要な機会であり、関わっているメンバーが情報を共有することで、それぞれのネットワークを生かし

て、一人でも多くの子どもを救うために働きかけができた。
・ばら教室ＫＡＮＩにおいては、日本の学校生活への適応を目的とした指導を行うことで、学校生活への戸惑いが少なくなり、安定した学校生活を送ることができ、教室を修了した児童、生徒が在籍校を中途退学するケースがなくなってきた。
・さつき教室においては、演劇ワークショップに取組んだり、大学生や高校生と交流を行い、地域の仕事を学んだりすることで、自分の将来について、自分がやりたいこと、進みたい道などを考えるようになった。
・より学校生活のイメージができるように、体験的な活動を取り入れた学校見学を実施できた。
・家庭の問題や生活面での課題を抱える生徒に、指導者が寄り添い、生活指導を根気よく行ったことで、生徒が精神的に安定し、学習に対するモチベーションを高めることができた。指導者の学びも多くあった。

【課題】
・今年度、主幹教諭や市教育委員会の担当者との連携を密に行えたため、効率的に子どもたちの支援を考えることができたが、まだまだ外国籍の児童が少ない小学校においては、可児市国際交流協会の取り組みすら周知されていない現状があった。学校に身所属の子どもを洗い出す就学時健診（主に10月）より、もっと早い段階で見つけられたら、もっと子どもたちにいい効果が与えられるのではないかと悔やまれる。
・保護者の中には、金銭的なことや日本文化に慣れないことから、子どもの就学にまだ積極的になれない方もいる。保護者への働きかけも重要となってくる。
・就学年齢超過の子どものためのさつき教室においては、家庭の金銭的な事情から就労したり、保護者が教育制度を理解していないことや、保護者との折り合いが悪いことなどから、入室しても継続することが難しい生徒もいる。また、来日の事情が親からの呼び寄せであることが多く、ホームシックや家族とのコミュニケーション不足などもあり、目標をもつことが難しい生徒もいる。
・今年、中学卒業程度認定試験を5人が受験し、うち1人が「さつき教室」の生徒であった。（ちなみに3人は、美濃加茂市在住の「かがやき教室」の生徒で、残る1人は全科合格。3人は、引き続き勉強を継続中）
・ばら教室以外は専用教室もなく、机やイスも不足している状態。環境の整備が整っていない。現在、ひよこ教室は、可児市勤労者総合福祉センターの視聴覚室を借り、ゆめ教室、さつき教室は、可児市総合会館分室の研修室を使用している。分室は取り壊しが決まっており、教室の開催場所が未定である。

４．その他（今後の取組等）
・ばら教室ＫＡＮＩにおいては、発達障がい又はその可能性のある児童が今後も増えていくことが予想されるため、スタッフの増員を予定している。
・今後も、子どもの就学に対し理解がない保護者に対し、積極的な働きかけを行っていく。
・学校の先生が参観にきてくれることで子どもたちのモチベーションも高まることが期待されるため、参観にきてもらえるよう学校側に働きかける。
・現在は市の施設である総合会館分室と可児市勤労者センターの視聴覚室を使用しているが、総合会館分室は取り壊す予定である。場所の確保など環境の整備について検討していく。
・手続をしないで帰国、転居等をする外国人の把握は大変難しく、学齢簿に載らない外国人児童生徒の多くは居住実態がない居所不明者であった。過去にさかのぼって不就学者に働きかけることは困難なため、住民登録にきた段階で、就学について確認していくことが重要。市民課との連携をより密にしていく。
・グループワークに慣れていないさつき教室の生徒たちには、グループワークの機会を増やしたり、「合宿」と「演劇ワークショップ」に引き続き取り組む。
・日本語でディベートの授業も有効なため、さまざまなテーマでグループ討議に取組む。
・保護者に向けた進路ガイダンスは、さらに機会を増やし、授業料などについてなど具体的な情報提供をする。
・「合宿」は、クラスの団結や学習のモチベーション維持に有効だったので、今後も取り組む。
・キャリア教育、ライフプランニングとして、職場体験や企業の方々との交流の機会も増やしていく。

※　枠は適宜広げること。（複数ページになっても差し支えない。）